

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



らぶ おん

小説 山本沙姫
挿絵 泉まひる

プロローグ

第一章 昭和の恋愛映画みたいな出会い

第二章 ベタなラブコメみたいな出会い

第三章 お淑やかになりたくて

第四章 廊下でドッキリ

第五章 コルク弾が取り持つ仲

第六章 真夜中の露天風呂で……

第七章 蛍の川原で

第八章 秘密の祭り

第九章 湯煙の中で

エピローグ

登場人物紹介

Characters



みすぎあかね
三杉 茜

紀彦が泊まる温泉旅館を経営する、しっとりとした落ち着いた雰囲気美人女将。長身スリム系のプロポーション。機械が苦手。



おおともなつみ
大友 夏美

旅先で思わぬ出会い方をする女性旅行者。巨乳に加え少し強気なところがあり、勘違いされやすい性格を本人も気にしている。

さがらのりひこ
相良 紀彦

少し前に失恋、その傷心旅行中に虹丘温泉に立ち寄る。

第六章 真夜中の露天風呂で……

宿に戻ってしばらくすると、紀彦の部屋に二人分の夕食が運ばれてきた。メニューはもちろんな、地元で採れた新鮮な川と山の幸をふんだんに使った和食である。鮎の塩焼きに手長海老の天ぷら。それに茸入りの茶碗蒸しなど、いずれも鮮やかな見た目や香りで食欲をそそる逸品揃い。そしてデザートにはもちろん、名物の桃が副^そえられている。さらに夏美のリクエストで、日本酒がお銚子で三本用意されていた。

(まあ、このぐらいなら大丈夫だな……)

紀彦は下戸とまではいかなないものの、酒が呑める方ではない。しかしせっかくお酌してくれると言うのに、無下に断るのは失礼だということは心得ている。豪快な性格の彼女だけに、もし酒豪だつたりしたらどれだけ付き合われるかと不安であった。そうなった場合でもバカにされないように付き合う覚悟はあったが、徳利の数を見て内心ホッとす。

「それじゃあ二人の出会いを祝ってー、かんぱーい」

「ち、ちよつと大げさだなあ……乾杯……」

テーブルを挟んで向かい側に座り、お猪口^{ちよこ}を持った手を、嬉しそうに高々と掲げる夏美。対して紀彦は、元氣すぎる彼女に気後れするように、おずおずと手を伸ばす。

チン……。

白いお猪口が澄んだ音を小さく立てて打ち鳴らされると、賑やかな宴のはじまりだ。用意された美味しい料理に舌鼓を打ち、よく冷えた日本酒を飲みながら、今日一日の出会いから互いのことについてまで色々と言ひ合ふ。趣味のエアガンやウサギのことや、お互いに東京から来たことなど、話は尽きることがない。やがて親しくなっていくにつれて、若い男女にとつて最も関心ある話題に移っていく。

……そう、それは恋愛に関する話。

「ほらあ、あたしってば、こーんなに美人でセクシーでしょお。ヒクッ、だからあ、男がいっぱい言ひ寄ってきたわけよ。頼みもしないのに、ヒクッ、貢いできたなんて奴もいたわあ……。ホント、あたしってば、罪な女よねえ」

「……」

お猪口に注いだ酒を何杯もあおりながら、夏美は得意げに胸を張って自身の男遍歴を語る。黙って聞き手に徹していた紀彦は「貢いできた」という言葉に反応して一瞬こめかみをピクリと震わせた。

「でもね、いい女にひよいひよい靡いてくる、軽い男ばかりじゃなかったのよ。中には……ひっ、優しく……誠実そうで、ひんっ、もう自分のすべてを捧げてもいいって思ったぐらい、ひくっ、好きになった素敵な人もいたわ……」

しかし話が進むにつれて、彼女の口はだんだんと重くなっていく。鼻を吸ったり、潤んだ目をハンカチで拭いたりといった仕草も見せるようになってきた。

(大友さん、こんな辛そうな姿を見せるなんて……)

いくら酔っているとはいえ、強気な彼女が知り合ってまだ間もないのに弱々しい姿を晒してくるのが、紀彦には意外であると共に少し嬉しくも思えた。なぜならば、それは今まで嫌っていた自分に対して、多少なりとも心を許せるようになってきている証だから。

「それなのに、ウィッ、いざ付き合ってみたら、お前はベッドの中でも五月蠅そうだから」なんて言って、ヒクッ、すーぐにあらしの前からいなくらっちゃうんだから……」

結局、惚れた相手もその正体が身体目当ての軽い男だったのがよほど悔しかったらしく、眉間に皺を寄せて語気を荒げると、またまた日本酒をクイッとあおる。その姿は女性にしては勢いがありすぎて、凜々しい美しさを醸し出しているように思えた。

「だからね、あたしいーつかお淑やかになってえやろうと、んくつ、思ってたわけ。あの女将さんを見て、ひくつ、ピーンときたわあ。この人に教われれば、ひんつ、あたしも淑女になれるってね……」

話を聞いていて、茜を感じ取っていた淑女になりたい後ろ向きな理由というのはなんとなくわかってくる。しかし同時に、新たな疑問の元でもあった。

「……そ、それで、大友さんはその男達の中によりを戻したい人がいるの？」

「まさかーはははははつ、ただ、あいつらを悔しがらせてやりたい、ひくつ、らけよ。オレはこんないい女をふったのかー、らんでね……うふふふつつ……」

思い切ってぶつけた質問がなぜかウケたらしく、彼女は手を大きくパンパンと打ち鳴ら

し、ケラケラと大笑いする。沈んだりハイになったり怒ったり、感情の変化の激しさはシラフの時よりはるかに大きい。

「そうなんだ。だったら……やっぱ無理してまで頑張る必要はないんじゃないかな？」

「なっ、何よいきなり。おねーさんに、ヒクッ、説教でもするわけえ〜」

顔を真っ赤にして威圧的に言い放つ酔っぱらいのお姉様に臆することなく、真面目な顔で彼女を見つめながら、紀彦はゆっくりと諭すように語りはじめた。

「そうじゃないけど……オレ、大友さんのその……すぐく元気がいいところに魅力を感じる男って、きつといると思う。今までは運が悪くてめぐり合えなかっただけで……」

「さ……相良、くん……」

優しい言葉が胸に響いたらしく、いきり立っていた夏美の表情がだんだんと緩んでいく。まるで春の日差しに、凍てついた湖の氷が溶けていくように。

「だから無理してお淑やかになるより、本当の自分を好きになってくれる人を探す方が、前向きでいいと思うよ」

年上の女性にちょっと偉そうだったかなと感じつつも、素直に思っていることを言い終えた彼は照れ隠しをするように、手元に残った鮎の塩焼きにかじり付く。

「……そんな事言ってくれたの、あんらがはじめてよ。相良くん……」

嬉しいような寂しいような、複雑でちょっと暗めの表情を浮かべながら、夏美は目の前でかっこ悪く焼き魚に食いつく男を見つめた。

「でも……オレは、苦手だけどね……」

「んぐー、なーんかきにいらぬ言い方らなあ〜」

少ししんみりした彼女を元氣付けようと、わざと意地悪な笑みを浮かべて余計な一言でオチをつけた紀彦。狙いは成功したものの、怒ってテール越しのし掛かってきた夏美にこめかみを握り拳で挟まれて、グリグリと押し付けられるハメに。酔った勢いで無遠慮に締めつけてくる攻撃は、女の細腕からは想像がつかないほど痛い。それに大きく開いた胸元が目の前に来て、フルフルと揺れるのが気になって仕方がなかった。

「わわっ、ごっ、ごめん、オ、オレが悪かった……」

謝りながらも視線はチラチラと、勢いよく飛び出してしまいそうな乳房に向いてしまう。バレたらより一層責められるのは間違いないのに、邪な男心を抑えられない。

「んーふふふ、まいったかあ〜。罰として、あんらの恋話もきかせなさあ〜い。あ、でもオクテそんな相良くんには、浮いた話らんでないかなあ〜、ひくっ……」

締め技に苦しむプロレスラーのように、畳をバンバン叩いて降参する紀彦に、夏美はニヤリと笑ってお姉さんぶった口調で命令を下す。

「わ、わかった……わかったから、放してえ〜」

情けない声を上げてゲンコツ攻撃から解放されると、彼は大きく深呼吸して心を落ち着かせる。そしてゆっくりと語りはじめた。

「オ、オレだって……女の子と、付き合ってたことありますよ。つい最近まで……」

「最近まれえ？　じゃ……フラれちゃったのお？　それで、ひくつ、傷心旅行ってやつでここへ来たのねえ〜」

視線を落とし、たどたどしい口調で話しはじめると興味津々な笑みを浮かべながら、夏美が顔を覗き込んでくる。妙にギラギラした視線が、胸に痛い。

「フラれた……その方がマシだったかも……」

「フラれた方がマシい？　あ、ご、ごめん……ひよつとして……」

うな垂れて答える紀彦を見て、何かを感じたらしく彼女は両手を拝むように合わせて、真剣な表情で詫びてきた。

「あ、ち、違うんですよ。別に恋人と死に別れた、なんて話じゃなくて……実はオレ……二又かけられてた、と言うより……ただの……金づる扱いだったんですよ……ぐすつ……」

彼女が勘違いしているのを察した紀彦は、気分を変えさせようとわざと大げさな手振りを入れて、おどけた調子で自分の失恋を話そうとする。しかし辛いことを笑い飛ばせるほど、彼は器用ではない。溢れてきた涙を手で拭い、鼻を吸る彼の目の前に置かれたお猪口に、頼みもしないのに日本酒が注がれる。思わず夏美に目を向ければ、彼女は目尻を震わせて悲しげな表情を浮かべていた。共に辛い失恋を経験した者同士、何か感じるものがあるらしい。

（大友さん……オレのことなんか、何とも思っていないかと思ってたのに……）

年上の美女から優しくされて、まだ傷の癒えきらない心が大きく震えた。

「んっ……ぶはっ！ それに……」

そろそろ厳しくなってきたが、気を回してくれた彼女のことを思い一気に飲み干す。喉元がカーッと熱くなるのを堪えて、さらに話を続ける。

「お母さんの病気を治すのに必要なんで、んくっ、頼まれて……お金、渡しちゃって……」
目の周りや鼻先を真っ赤に染め、紀彦は嗚咽を上げる。手元に置いたお猪口に、またも夏美は冷酒を注いできた。少々おぼつかなくなってきた手で口元までつまみ上げるが、さすがにすぐに口に入れるのはためらってしまう。

「……挙句の果てに今時ミツグ君なんて呼ばれちゃって……カッコ悪いよなあオレって……」

話を終えるとしみじみとした表情で、紀彦はクイツと酒を煽った。いつもは辛いことを胸の内に溜め込む癖のある彼だが、酔いが回ってきたせいで素直に胸の内を明かしている。「そう……悪い女に騙されちゃったのね……ささ、もつとどんどん呑んで、そんな女のことなんか忘れちゃいなさい」

大きな瞳に涙を浮かべながら、和服の美人お姉様は彼を慰めるように二杯目三杯目を勧めてくる。その姿には、先程までウサギのぬいぐるみで無邪気にはしゃいでいた子供っぽさはまるで感じられない。茜のように優しくお淑やか、とはいかないがそれなりにしつとりとした色気があり、実に美しい。

「えっ、あ、はい……いただきます……」

お姉さんぶった優しい口調で話しかけられると、ついぎこちない敬語で返してしまふ。
(けっこう優しいところもあるんだな。嬉しいけど……これは、ちよつと……)

静かに酒を注ぐ上品な仕草を見ながら、紀彦は心の中で喜ぶ。その反面弱ったことに、ふと気がつけばいつの間にかお銚子が追加されているのだ。それも二本や三本ではない。続々と運ばれてきているのである。そのほとんどは夏美の胃に収まっているとはいへ、彼自身も普段呑んだことがないぐらいの量を付き合わされていた。いよいよ目が回りはじめていたが、自分を氣遣つてくれることを思うとどうにも断りきれない。

「ふうー、なんらかまた暑くなってきたわねえ……」

しかも時が経つにつれて酔いが回ってきたせいも、夏美はこれまで以上に大胆な仕草を見せるようになってきた。帯を緩め、胸元を大胆に開いて白い手の平で。パタパタと、首筋や胸の谷間辺りを扇ぐ。ほんのりと桃色に染まり、いつ玉の汗が浮いた乳房が露になり桜色の乳首までもが飛び出してしまふか気が氣ではない。

「ちよ、ちよつと大友……さん。呑みすぎ……なんじゃない？ そろそろやめたほうが……いいですよ……」

へたに刺激するとまた怒らせてしまいそうなので、紀彦は下手に出ながら呑むのをやめさせようとする。

「へーきへーき、こんなのまだまだよお。ほら、たまにはあんたも注ぎなさい！」

対して、命令口調で答えながらサツとお猪口を持った手を差し出す夏美は、明らかに呂律が回らなくなってきた。その態度が、酒に弱い青年を徐々に不安にさせていく。それに彼女の身体のこと心配だ。

「ほっ、ほどほどにしておかないと……後が大変、だよ……」

酔いどれ美女を気遣いつつ、紀彦は夏美に呼びかける。しかし彼女は聞く耳持たず、恐る恐る注いだ酒をクイッと一気に飲み干して徳利を奪う。

「ほらほらあり、あんたも食べてばかりじゃなくて、もつと飲みなさいよお。今夜はトコトンいくわよお」

そしてトロンと座った目付きで見つめながら、もう何杯目かわからないお酌をしてきた。その様子は、ある意味風呂場で桶をぶつけられた時に見せた怒りの形相よりも怖い。

「い、いや……もういいよお……」

とつくに限界を超えている紀彦は、最早彼女のペースについていけない。お猪口をテーブルの上に逆さに伏せて、上に手の平を載せてこれ以上注がせないようにする。

「むー、あらしの酒が、ヒクッ、呑めないってわけえ。ずーいぶーんと出世しらもんねええ」

すると彼女は目尻を「キッ」と吊り上げ、呂律の回らない舌で意味不明な文句を言った。さっきまでの優しいお姉さんから一転して、強引な酒豪女に変貌した瞬間だ。

「もっ、もう勘弁してえ」

しつこい絡みについてに耐え切れなくなった紀彦は、ヨボヨボとおぼつかない足で立ち上がり、その場から逃げ出そうとする。

「こらあゝ、あらしを残してどーこ行くつもりよおー」

しかしそうはさせじと、目の前に異様にテンションの上がった酒酔い娘が両手を広げてドンと立ちはだかった。まるで柔道の試合でもおっぴぼめるかのような勢いで、猛烈に抱きつこうとしてくる。

「ちよっ、ちよっとトイレへ……わあああつっ！」

「ええっ!! ひっひやあああつっつっつっ！」

ズルッ! ドサツ!

あまりの気迫に押されて、足を滑らせた紀彦は前のめりに倒れ込む。

ペチッ!

「んっ……んんーっ、あ、あれ? 何だ……これ?」

顔面を強打した彼は、顔の周りに何か奇妙な違和感を覚える。てつきり鼻先を畳にぶつけたと思ったのに、強い衝撃をうけることはなかった。代わりに柔らかくて、ペタペタと湿ったもの、コンニャクのような物体が鼻の周りや目元、さらに酔って火照った左右の頬にも纏わりついている気がする。ちよつと前に似た感覚を受けた気がするが、咄嗟に目を閉じたため何に接しているのかはわからない。

(……ん? コ、コンニャクなんて、料理になかったはず……)

すぐさま身を起こして何が起きているのか確認したかったが、酔いが回っているせいで身体の自由がきかない。ふと気がつけば、顔に密着する謎の物体は何やらウネウネと蠢いている。それに、火照った柔肌の上からでも熱いと感ずるほどの熱を纏っていた。と言つても火傷するような熱さではなく、ゆつたりと温泉に浸かっているように心地いい。

(あ……何だかすぐく……気持ちいい……それに、いい香り……)

アルコールの影響でぼやける彼を夢心地にしていくのは、顔に貼りついた軟体だけではない。鼻腔に入り込む、花の蜜のように甘酸っぱい香りが劣情心をあおり、下腹部を疼かせていく。まるで直接、股間の一物を揉みくちやにされているかのように。

「……んっ、うっ、ううん……」

すると追いつきをかけるように、すぐ近くから聞こえてきた吐息混じりの艶めかしい喘ぎ声が内耳の奥をくすぐる。その響きは頭を中から撫でられるように心地いいが、こんな甘ったるい声を出せる人など、今ここには一人しかいない。

(……ま、まさか……)

嫌な予感が頭をよぎり、彼はゆっくりと目蓋を開く。するとぼやける視界いっぱい、薄桃色の世界が広がった。まるで静かな海のようにゆつたりと波打つその物体の正体は、絹のように滑らかな乙女の柔肌。そう、転倒した拍子に夏美を巻き込んだだけでなく、彼女の胸の谷間に顔面を押しつけてしまっていた。汗ばむ柔肌が顔中を包み込み、興奮気味に高鳴る胸の鼓動がトクトクと伝わってくると、釣られるように自分の心臓も激しく脈打



「い、今行きますから、そこを動かないで……」

足を挫いたか、あるいはマムシにでも噛まれたか、とにかく尋常じゃなさそうな彼女を助けようと、紀彦は大急ぎで駆け寄る。

カランカランカランカラン……。

「あっ、イヤ……こ、来ないでえー！」

ぷしやあああああーつつつつ！

悲痛な叫びと共に、突如シャワーのような水しぶきの音が響き渡る。そして彼女の足を、一筋の小川が流れていく。月の光を反射して、キラキラと宝石のように輝きながら。

（ま、まさか女将さん……おしっこ、してるの!!!）

懐中電灯に照らされた浴衣姿の美女は、裾をお腹の辺りまで捲り上げてしゃがみ込んでいた。丸出しになった白い洋梨型のヒップが、恥ずかしさでほのかに桃色に染まり実の色っぽい。そしてこちらを振り向き、黒い瞳を潤ませながら顔を真っ赤に染めて恥ずかしがる表情が可愛らしく、頭で見てはいけないとわかつていても目を離すことができない。

「ああっ！ 見ないで……見ないで下さいまし……」

震える声で、茜は必死に訴えてくる。その間にも放尿は途切れることなく続き、ついに足元に大きな湖ができてしまった。

チヨロチヨロチヨロチヨロ……。

やがて水音は静かに消えていき、すべてを出し切った頃になって呆然としていた紀彦は

ようやくハッと我に返った。

「……あつ！ ごつ、ごめんなさい……オレ、そんなつもりじゃ……」

慌ててつけっぱなしの懐中電灯を背中に回し、ひたすらペコペコと頭を下げて謝る。

「い、いえ……ち、違うんです。わたくし、その……ほ、蛍が……」

「ほ、蛍？ 蛍が何か？ お、落ち着いて……女将さん……」

丸出しのヒップを左右にフルフルと揺すり、慌てて立ち上がって呼びかけてくる彼女が、何を言っているのかわからない。

「だっ、だから、その……蛍が、わたくしの……あその上を這いまわって、くすぐったくて……」

少し目を逸らし、頬を真っ赤に染めながら震える声で何かを言おうとする茜。断片的な話ながら、いったい何があったのかなんとなくわかってきた。彼女の浴衣の裾から入り込んでいた蛍の群れ。そして腰周りに輝く薄緑色の光。おそらくは、女性にとって最も敏感なヴェーナスの丘に入り込んだ蛍が繁みの中を這い回り、そのせいで尿意をもよおしてしまったのだろう、と。

「そ、そうだったんだ……一斉に光りだすことといい、こつ、ここの蛍って……ホントに不思議な習性があるんですね……ははっ……」

人として最も恥ずかしい姿を見てしまい、動揺した紀彦は咄嗟に明るく振舞って場の空気を変えようとする。悪気のない、彼なりに気遣ったのであった。

「ひ、ひどいです、そんなに笑って……ダメって言ったのに、こっ、こんなに恥ずかしい姿見て……ひどいです、相良様……」

しかし思いは伝わらなかつたらしく、いつもの温厚さが影を潜めた茜は目尻を「キッ」と吊り上げ、睫毛をヒクヒクと震わせながら詰め寄ってくる。

「お、女将さん……」

しくじった、と思っても後の祭り。せつかくロマンチックに河原の夜景を楽しんでいたのに、何もかもが壊れてしまった気がした。

「だっ、だから……責任、とってくださいっ！」

周りの蛍がまたも驚いてパッと散るほどの金切り声を上げると、茜は華奢な両手で肩を押さえつけてきた。その力は女性とは思えないほど強く、紀彦は身動き一つとることができない。背筋が震え、ジットリと汗が浴衣に滲み出ていく。

「せ、責任？ い、いったい何をばぶうっ！」

ムチユウツ！

言葉を遮るように、震える唇がふさがれた。柔らかく暖かな、彼女の唇で。その瞬間、桃の果実を擦り付けられたような甘く酸っぱい感触が、唇からモワモワと広がっていく。鼻腔から滑り込む花の香りのような体臭も加わって、とてつもない失敗に綻びかけた心を優しく繕ってくれた。

「んっ、んっ、んっ……ぬぶちゅっ、はっ、はぶうんっ……」

そして前歯を抉じ開けた舌が、強引に口腔内に侵入してくる。生暖かい粘液を纏った柔肉は頬の内側や歯茎を隈なく舐め回したり、さらに舌に絡みついてきたりと縦横無尽に動き回る。その大胆な舌使いは、浴衣美人のあられもない姿を拝んで以来密かに充血しはじめていた股間の一物を奮い立たせるのに十分な威力を持っていた。激しく脈打つ心臓が海綿体がけて熱い血液をどんどん送り込み、むず痒い一物を破裂しそうなほどに膨張させていく。

じゅっじゅっじゅっ……。

さらに口の隙間から溢れ出る唾液を啜る淫靡な水音が、彼の興奮に拍車をかける。ビクビクと脈打つペニスは早くも先割れが開き、透明な粘液を滴らせはじめていた。

(な、何で……女将さん……)

ぼやける頭の中で、紀彦は必死になって今の状況の分析を試みる。しかしいくら考えたところで、なぜここまで彼女が迫ってくるのかわかるはずがない。

「……ぶっはあああつ……はあつはあつはあつ……ど、どうしちゃったんです？ 女将さん……」

しばらくしてようやく解放された彼は、荒い息を吐きながら興奮気味の口調で問いかける。

「だって……勇敢で優しい相良様に何度も助けられて、す、好きになってしまったから……それに、恥ずかしいところまで見られて……も、もう、我慢できませんっ！」

すると彼女は足元に跪き、下から潤んだ瞳で見上げながらたどたどしい口調で秘めた思いを語った。

「好き?? そ、そんな……オレなんか、ただたまたまここに来ただけの旅行者なのに……」
「いずれこの地を去るのは承知しています。だつ、だから……その前にせめてわたくしが愛していたという証を、受け取ってくださいませ」

切なそうに目を潤ませながら、艶めかしく震える声でお願いすると、茜は紀彦の足元にしゃがみ込んで、腰の辺りにギュッとしがみ付く。その力は、華奢な細腕からは信じられないほど強く、避けることはできない。しかも股間に右の頬が押しつけられてしまっている。恥ずかしさに火照る柔肌の感触が心地よくて、浴衣の下男根はますます固くなっていく。

(ま、まずい……こんなの、知られたら……)

固く目を閉ざし、必死に気をそらして紀彦は今にも暴れだしそうな男の筋肉を落ち着かせようとする。しかし平靜を取り戻せるはずもなく、彼は浴衣の裾を開かれ、さらに下に穿いたブリーフにも手をかけられた。

「ちよっ! そ、そこは……ダメ、アッ!」

ブルンッ!

有無を言わさず下ろされた下着の中から、真っ赤に膨張した肉の巨木が飛び出した。「もうっ、わたくしの……わたくしの恥ずかしい姿を見て、こんなになるなんて……酷す

ぎます。相良様……」

稲妻のような青筋を立てた一物を、我が子を愛でるような優しい目付きで見つめながら、茜はイタズラっぽい口調で呼びかけてくる。

「ご、ごめんなさい……だ、だから……もう……」

混乱してわけもわからず謝りながら顔から火を噴き、両手で剥き出された股間を覆い隠そうとする紀彦。だが手首を掴まれて、その抵抗は封じられてしまう。

「だめですよ、責任取ってもらうんですから……」

からかうような口ぶりで言う茜は真珠のように艶やかな唇を開いて、真っ赤に膨らんだ亀頭を頬張った。

ぬめちゅっ！

「ええっ！ わっ、はうっ!!!」

柔らかな唇が触れた瞬間、敏感な表皮の中を静電気のような痺れが走り、背筋がゾクゾクと震える。

くちやくちゅくちやくちゅ、ぬるっ、ぬぶつくちゅくちゅつつつつ……。

さらに続けて、キスの時をはるかに上回る激しい動きで舌が一物に絡みついていた。丸みを帯びた舌先で小刻みに震えながらエラ下をくすぐったり、裏筋をなぞっていったりと、敏感な急所を次々と責め立てていく。

「んくっ、んっんっんっん……えろっ、はぶっ、くりゅちゅっ……」

はじめての口奉仕は、自分の指では決して味わえない気持ちよさをもたらしてくれる。粘液まみれの舌が張り詰めた表皮の舐めるたびに、温泉よりはるかに熱く、電気風呂より痺れるような感覚がジワジワと染み込んでいく。

（お、女将さんが……オレのを……そんなに、オレのことを……）

長い睫毛をヒクヒクと震わせて、一心不乱に思い人を気持ちよくさせようと奉仕し続ける茜。その健気な姿が愛おしく、紀彦は魂が大きく震えた。しかし奉仕されながらも、脳裏にこれまで彼女と接してきた時のことがアルバムをめくるように蘇ってくる。ケガをした自分を治療してくれたたり、大切な着物を破いてしまったのに許してくれたたり、そんな優しく素敵な女将さんを、己の不浄なモノで汚したくない思いが沸々と湧き上がってきた。

「だ、だめだ……やっぱり……オレ、茜さんに……こんな、こと、んんっっ……いつ、いけない……あふうっ！」

ペニスの根元に力を込めて、いつ起きてもおかしくない射精を封じつつ紀彦は苦しげに呼びかける。なんとか彼女の手を振り解き、か細い両肩を軽く掴むが乱暴に振り払うわけにもいかず硬直してしまう。

「はあふっ、い、いいんでふ……紀彦、ひゃまあ……このまま、出して、んんっっ……」

気兼ねする彼にかまわずに、茜は射精を促しながら脈打つペニスを舐め回し続けた。先割れの中にまで舌を這わせたり、軽く前歯で火照った肌を擦ったりと、次々と手を変えて彼女の繰り出す愛のテクニクは、徐々にぼやける心の中にわずかに残った理性という名



の鎧を剥ぎ取っていく。

「うっ、だっ、だめだあ、出るうっ……」

必死に爆発を抑えてきた紀彦だったが、さすがに最も敏感な部位を弄くり回される快感には勝てず、亀頭の割れ目が大きく開く。

ブシューッ！ ビュッビュッビュルッビュルルッツツツ！

「きゃあっ！」

展望公園から見える間欠泉にも負けない勢いで、熱いスペルマが噴き上がる。そして浴衣の襟元を乱した美人女将の、火照った顔や首筋を白く染め上げていく。

「うふっ、いっぱい出ましたね……」

肌にかかった白液を掬った指を、ハチミツでも舐めるようにしゃぶりながら茜は目尻をトロリと下げて嬉しそうにはしゃぐ。子供のように無邪気な表情と、スペルマを舐める舌の艶めかしい動きのギャップが色っぽく、紀彦はつい見入ってしまう。

「お、女将さん……そんな、汚いよ……」

己が分身から吐き出した栗の花の香りを漂わせた白液を口にする茜を、紀彦は申し訳なさそうに押し留めようとする。しかし彼女は目を閉じて首を横に振る。

「相良様の出したものが、汚いなんてことはありませんわ。それにお客様に恋して、こんなはしたないことまでしてしまうなんて……わたくし、女将失格です。だから今は……今だけは、茜と呼んでくださいませ。紀彦……様……」

すべての精液を舐め尽くした茜は、そう告げると草むらの上に横たわる。そして浴衣の裾を摘み、恥ずかしそうに恐る恐る腰の上まで捲り上げた。月明かりの下に、浴衣美人の秘密の丘が包み隠さず曝け出される。柑橘類の果汁のように、甘く爽やかな蜜の香りを漂わせながら。

「来て……ください。それともやっぱり……歳の離れた女は嫌ですか？」

右手の親指をしゃぶり、甘ったるい声でおねだりしてくる茜。愛しい男性に抱かれる期待と、拒絶されないかという不安が入り混じったその表情は、なんとも言えぬ色香を醸し出している。彼女を欲して止まない心を、紀彦はもうどうすることもできない。

「あ、茜……さん……」

飢えたケモノのような勢いで、我慢しきれなくなった彼は横たわる浴衣美人の上のし掛かる。そして未だ勢い衰えぬ肉槍に手を添えて、略奪者の訪れを待つ秘密の花園へと突き立てようと迫った。

「んっ、くっ……あ、あれ？ ふんっ……」

しかし多少なりとも知識はあるとはいえ、薄暗い夜空の下ではどこへ己が分身を沈めればいいのかわからない。狙いが定まらない肉槍は、薄い恥毛に縁取られた薄紅色の柔肌にポチポチと、先走り汁のスタンプを押していくばかりだ。

「あっ、あんっ……そこじゃなくて、もっ、もっと下……」

チプッ、チプッ、チプッ……

ふくよかな身体を揺らされるたびに、真珠のように艶やかな唇から辛そうな吐息が漏れる。

「だっ、大丈夫？ ううっ、痛くない？」

初めて男のものを受け入れた彼女を気遣い、紀彦は腰を止めて優しく呼びかける。

「もうっ、そんなこと気にしないでよ。あっ、あたし、紀彦になら……んんっ、なっ、何されたって、はふうっ、平気なんだから……」

少し引き攣った笑みを浮かべながら、夏美は余裕のあるフリをして答えた。しかし彼女の股間から滴る初めてのの印を見れば、激しい苦痛に襲われているであろうことは男でも容易に想像がつく。そんな彼女に負担をかけまいと、紀彦は注意して静かに腰を前後に揺り動かす。

ずりっずりっ、ずずすっ、ずしゅっずしゅっ……。

狭い産道を押し広げ、エラで肉壁を擦りながらゆったりと出入りする。熱い粘液に包まれながら。

（はじめての女の子って……こんなに、きついんだ……）

経験済みだった美人女将の柔らかいヴァギナのもたらす愛撫のような感触も、もちろん気持ちよかった。しかしずっと自分の訪れを待っていてくれた夏美の初々しい肉穴は、それとは違う魂ごと抱きしめるような、感動的な出迎えをしてくれた。そして同時に、このきつい膣口をみずからの一物で柔らかくほぐしていける喜びも与えてくれている。

ググクッ、じゅぼつ、ぐつぐぐつ……ジュボッ……。

押しは引き、引いては押すたびに奥園から潤滑剤となる愛蜜が滴り落ち、固かった肉壁もだんだんとこなれて柔らかくなっていく。

「あつ、あはあんつ、あたし……はじめて、はじめてなのがいい……」

秘肉の固さが取れていくにつれて、彼女の声も徐々にしっとりとした艶を帯びてくる。

「のっ、紀彦の……んふう……んくつ、オチン、チンで、はっふはあん……お、お……」
半開きの口から奥園に物がはさまったような、ただたどしい口調で漏れる吐息混じりの喘ぎ声。どうしても告げたい淫らな思いを、理性という名の心の門がおし留める。しかしそれも、閉ざされた城門を打ち破る丸太のような一物のつき込みがもたらす痺れるような快感には太刀打ちできない。

「おま○この中、グリグリ、コリコリされるの……ふはあつ……きつ、気持ちいいいいーんっつっつ！」

プシユルルル……ドッドオーンツツツツ！

何かのはじまりの合図を思わせる花火の音と呼応するかのように、夏美の口からこの上ない淫らな言葉が飛び出す。それはもう、彼女が処女の痛みを克服し、愛する人の巨根で膣内をかき回される喜びを完全に掴み取った証だ。

「なっ、夏美い……もつと、もつと気持ちよくしてあげるうっ!!」

彼女の言葉が、それまで遠慮がちに腰を使っていた紀彦の心のリミッターを解き放つ。

真つ赤な手形がつくほど強くヒップを掴み、素早く何度も肉棒を突き込んだ。

シユシユツ、シユツシユツ……。

「あつ、ひうつ、ひいんつ、ちつ、乳首が……擦れちゃう……ひつ、ひやはあんつ！」

浴衣の下で柔らかな乳房が波打ち、敏感な肉粒がスベスベの生地で火がつきそうなほど激しく擦られる。

ぐちやぐちやぐちゆぐちゆ、ぐりぐりぶりゆぶりゆ……。

汗と愛液で滑りがよくなった膣内を、長い肉棒で激しくかき回していく。ただ前後に素早く動かすだけでなく、膝を屈伸させて突き込む角度に変化を加えたり、腰に捻りを入れて中に突き立てた一物を左右に揺すつたりと、様々な動きの変化を加えて。

ドンドンツ、ドンドンツ！

グチユクグシユツグチユツグシユツ……。

頭上で鳴り響く太鼓の音に釣られて、腰の動きが速く強くなっていく。

「んっ、んっ、んっ……くっ、はあんつ……いつ、いいっ、いいよおお……夏美の、ココ。すぐく締まって、くふうっ！」

ツルツ！ズニユウツ！

「ひゃあんつ！ なつ、何!!? 何するの、のりひこお〜」

ところが、ひときわ力を込めて腰を突き出したその時、スベスベのヒップを掴んでいた手が汗で滑り、親指で尻穴を貫いてしまった。恥ずかしい肉穴を突然弄られて、夏美は音

程のはずれた笛の音のような奇妙な悲鳴を上げてしまう。

ドンドン、ドンドンドンドン！

無論、それは太鼓の音のせいであらうには漏れていない。

「ごっ、ごめん。わざとじゃないから……あ、あれ？」

慌てて手を引いて指を抜こうとしても、まるで握られているように強く締めつけられてビクとしなかった。夏美の身体が強張って、括約筋が締まっているのである。だが、締めつけている当人はそのことにまるで気付いていない。

「ばっ、ばかぁ。早く抜いてよお。そっ、それとも……女将さんとも、こんなことしたのお〜」

愛しい男性に排泄口を弄くり回される恥ずかしさと、その行為によってもたらされるむず痒さ。二つの感触が入り混じり、夏美は混乱しながらもなんとかアナルに突き刺さった異物を抜こうとして、大きなヒップを上下左右に無我夢中で振り続ける。

ねぶっねぶっねぶっぷりゆるるっつっ……。

「ひいんっ、ぬ、抜けないよお……紀彦の、いじわるううう。お尻の中なんて触らないでよお〜」

「ちっ、違うよ……だつて、抜けない……んんっ……」

にゅちゅっにゅちゅっにゅちゅっ……。

言い訳をしながらも、必死に指を引き抜こうとする紀彦。しかしいくら手を引いても、

締めつけられた指は関節一つ分引つ張り出すことすらできない。それどころか指先で、直腸の壁をくすぐるように撫で回してしまう。

ペタッ、ブルッ、ペタッ、プルルッ……。

ゼリーののような肉壁が指先に貼りつき、プルプルとした心地いい感触が伝わってくる。それは腕の神経を通じて脳に伝わり、淫靡な信号に変換されてそこから全身へ向けて一気に駆け抜けていく。

「なっ、何？ 何だろう……夏美のお尻の中……こりこりするの、気持ちいい……やめられないよお……」

菊門の中に突き立てた指を捻るたびに胸の鼓動が激しくなり、パンパンに膨らんだ男根に鋭い痺れが走る。

「はっ、はあっ……へ、変だよ……お尻の中、グニグニされて……あっ、あんっ！ あっ、あたしも……」

背筋をビクビクと震わせながら喘ぐ夏美は、いつしか尻穴の中をかき回される感触をみずから貪りたくなってしまう。大きな桃尻を「の」の字を描くように振り回して、突き刺さった指を捻り回す。

ぬぶっぬぶっぐりゅぐりゅゆっゆっ……。

「うわっ、なっ、夏美い……んんんっっ!!」

すると紀彦の男根を、こなれて緩くなってきたはずの肉壁が再び強く締めつけてきた。

括約筋の強張りに釣られたヴァギナが、ギユウギユウときつく締まってくる。

「ひいんっ、すっ、すっごおいつ！　こんなに、こんなにいっぱい突いて、あっ、あひいんっ……」

ぐっちやぐっちや、ぎっちゆぐっちやぐっちゆぎっちゆ……。

スルスルスル……ブルルンッ！

激しく肉体を揺らす夏美は、さらに淫らで艶めかしい姿に変貌していく。帯が緩み、あのジャンボ水ヨーヨーに劣らぬ巨大な乳房が飛び出した。半球形の柔らかな乳房はうつ伏せになっているせいで自重で下向きに垂れ下がり、美しい釣鐘型に変形している。そして後ろから突き込まれる勢いに合わせて、上下左右に大きく波打つ。まるで巨大なプディングのように。

「はあんっ、のっ、のりひこお〜。こっち、こっちも、さわってえええええ……」

支えを失い激しく揺れるおぼつかない乳房が切なくて、夏美はまたもはしたないお願い事をしてくる。彼女の望みを聞き入れて、紀彦は右手でヒップを掴んだまま胸板が彼女の背中の上に重なるほど身体を前屈させて、左手でバストを掴む。

むにゅっむにゅっ、ぷちっぷちっ……。

「なっ、なんて柔らかいんだ……はあっ、はあっ、夏美の……おっぱい。すごく、プリプリしてて……気持ち、いいっ!!」

汗ばむ柔肌が手の平に貼りつき、餅をついているような湿っぽい音を立てる。それに指

の間に挟まったコリコリの乳首と、トクトクと素早く打ちつける胸の鼓動がアクセントとなつて、手の平いっぱい心地いい刺激を広げていく。

「やあつ、そ、そんなぐにぐにしてえ……おっぱい、つ、つぶれちゃううう」
ぐしゃつぐじやつぐちゅつぐちゅつ……。

「うっ、うっ、こ、これは……」

「あ、のりひこのお……オチン、チン、ぶるぶるきてるうん」

やがて肉壺の中をかき回す一物の中に、低周波マッサージ機を押しつけられているような痺れが走り始める。いよいよ発射の時がやって来た。しかし彼は、少しでも長く彼女の肉壺の感触を味わいたい一心で、肉棒の根元に力を込めてみずから射精を封じ込める。ぷりゅつぷりゅつくちやくちゅぐちゅ……。

「はあはあはあ……なっ、夏美い……キミのおま○こ、もっともつと……かきまわしたいつ!! 夏美いいい」

「のっ、紀彦おおお、いつ、いいよう……もつともつと、ここ、かき回して……お尻も、グリグリしてえんっ!!」

納豆をかき回すような粘り気のある音を立てつつ、何かに取り付かれたように淫らな望みを叫び合う紀彦と夏美。だが、終焉の時は刻々と迫っていた。

「だっ、だめだあ……オレ……もう……もたない……夏美の、夏美の中に……出したい……」



汗ばんだ喉を大きく反らして、紀彦は擦れた声で呼びかける。

「いつ、いいよお……あたし、あたしの中に……いっばい……いっばい、熱くてドロドロなの……ち、ちようだあいつ！ き、今日……大丈夫だからあつ！」

乱れ姿の浴衣娘も、求めに応じながらますます激しく大きな桃尻をシェイクさせる。上下左右に揺すったり、大きく円を描くように回したりして、ヴァギナに突き刺さった肉槍をこね回す。最後の瞬間まで、彼と結ばれる快感を身体の奥底に刻みつけるために。

ヌブツヌブツヌブツヌブツ……。

グジュグジュ、ブズブズブズツツ……。

ペチュッペチュッ、プチュックリユクリユツ……。

「あつ、あたし……もつ、もう……らめえ。イッ……イクッ、いくうっ！ イッチャうううううーんつつっつ！」

胸、ヴァギナ、肛門。三つの弱点を同時に責められる快感に、身も心も飲み込まれていく夏美は長い茶髪を振り乱し、火照って桃色に染まった喉を反らして絶叫する。彼女もぞわぞわとした心地いい痺れが背筋に集まってくるのを受けて、最後の時が近いのを感じ取っていた。

ぶずしゅつぶずしゅつじゅつじゅつ……。

ドンドンドンドンドンド……。

湿った肉同士が擦れ合う卑猥な音が、頭上の太鼓の轟きを超えるかと思うほど高らかに

鳴り響く。そしてついに、二人同時に達する瞬間が訪れる。

「紀彦っ！ 好き、好き、大好きいっ！ いっ、一緒に、一緒にイこうっ！ あっ、あっ、あっ、ああああーんっつっつっ！」

「ああっ、なっ、夏美いいいいいーっつっつっ！ すっ、好きだああああーっつっつっつっ！」

ドビュルルルルーツツツツツ、ドクン、ドクン、ドクン、ドクドクドクドクツツツツ……。

愛する人の名を声が枯れるほど強く叫びながら、紀彦は打ち上げ花火のような勢いで彼女の膣内に愛の証を炸裂させた。一物の根元から先端まで、電気ショックのような痺れが一気に駆け抜けていく。

「ああん……あたしの、お腹に……いっばい、熱いのが……紀彦の……赤ちゃんの、もと……」

膣内いっばいに子種が注ぎ込まれる熱さを感じ取り、夏美は半開きの口から歓喜の声を上げる。布一枚で仕切られた閉鎖空間いっばいに、甘酸っぱい乙女の体臭と膣えたスペルマの臭いが充満していく。

ズルッ、ズズズズ……。

ことを終えると夏美の手から力が抜けて、二人はズルズルと滑り落ちる。そして地面の上に、折り重なるようにパッタリと倒れた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

